

# グローバル化を考える

村 田 治

いま、グローバル人材の育成など、日本の大学のグローバル化が急速に進められています。学生や卒業生が世界へ出て行くことが求められ、これ自体は“Mastery for Service”を体現する世界市民を育成する関西学院にとって推進して行かねばならないことです。

初代院長ランバス先生は中国、アフリカ、ヨーロッパなど世界を股にかけ、教育・医療伝道に従事された、文字通り世界市民でした。関西学院は創立時から、キリスト教主義に基づいた国際色豊かな（グローバルな）学び舎として出発しました。

グローバル化は国際化とは違い、ヒト、モノ、おカネだけでなく、企業組織や金融システムなどの制度までもが国境を越えて自由に移動すること意味します。しかしながら、この一連のグローバル化の根底には世界的な大競争（Mega-competition）があることを忘れてはなりません。

グローバル化の要因は、東西の冷戦の終結による東欧、アジア、中南米諸国の世界市場への組み入れとIT革命による世界市場の統合にあります。いわば、世界が一つのマーケットに統合されたことが大きな要因です。このことによって、商品だけでなく、労働力の供給源としての大学教育も世界的な競争に巻き込まれていったのです。この大競争によって、世界での格差が拡大しており、特に、国と国との格差が大きくなっています。

その意味では、ランバス先生が世界中を伝道された時の状態とほとんど変わっておらず、今こそ、“Mastery for Service”を体現する世界市民が求められていると言えるでしょう。

(学長)

---

## 関西学院 歌声のキャンパス

田 淵 結

今年創立125周年を迎える関西学院は、1889（明治22）年に現在の神戸市王子公園のあたりに、ランバス先生に代表される南メソジスト監督教会により関西学院が